

祖先祭祀と家族・序論

上野和男

一 問題

二 祖先祭祀研究の動向

三 祖先祭祀研究の条件

四 家族の構造と祖先祭祀

論文要旨

最近とくに一九七〇年代以降、社会人類学・日本民俗学・社会学・宗教学などにおいて祖先祭祀研究が極めて活発に行われるようになってきた。一九七〇年以前の研究はフォーテス・M. のアフリカ研究がそうであったように、単系出自集団と祖先祭祀との関係であった。日本においてもこの時期の研究は、単系出自集団である同族組織や家と祖先祭祀の研究が中心であったが、一九七〇年以降の研究は、単系出自集団以外の親族組織と祖先祭祀との関係に関心があつまってきた。

こうした活発な祖先祭祀研究を促進させてきた条件の第一は、「仏壇ブーム」や「墓ブーム」に象徴されるように、日本社会が今日祖先祭祀をどのように遂行するかについて一種の社会問題的状況が見られることがある。第二は、戦後の日本の家族の変化をどう評価するかが家族研究者への課題になってきたことであり、この問題への接近にあたって祖先祭祀研究が大きな意味を持ち得ると考えられることである。第三は昭和初期に本格的に開始された

日本の家族・親族の実証的研究において、長い間家族は労働組織すなわち経済的な単位として研究されてきたのに対して、いま儀礼的祭祀的側面からの家族研究によって、あらたな家族研究の展開が求められていることである。

現在の祖先祭祀研究、とりわけこの共同研究「家族・親族と先祖祭祀」にはつぎのような課題が課せられていると考えられる。第一は日本の祖先祭祀の地域的な変差がます明らかにされるべきである。第二は日本の祖先祭祀の長期的・短期的変化が明らかにされるべきである。第三は祖先祭祀の諸形態が日本人の死者観、他界観とどうかかわっているかが明らかにされるべきである。第四は東アジアにおける日本の祖先祭祀の位置が明らかにされるべきである。これらを通して日本人の基層信仰のひとつとしての祖先祭祀を、現段階において、社会構造と祖先觀の両面から総合的に明らかにするのが本共同研究の課題である。